

# 1 授業研究部【体育】

## I 研究主題

### 人とのかかわりを深め、共にのびる子どもを育てる

～たのしい できそう いっしょにもっと！ 運動好きな十津っ子～

## II 主題設定の理由

### 1. 今日の課題から

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが社会で活躍するころには、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、ICT やビッグデータ、人工知能（AI）等をはじめとする絶え間ない技術革新により、社会構造が急速に変化していく時代となっていることが予想される。その激しい社会変化の中において学校教育では、子どもたちが、様々な社会変化に向き合い、自ら判断し、主体的に関わり、他者と協働し課題を解決しながら、よりよい社会とよりよい人生を創り出せる力を育成していくことが求められている。

こうした時代を迎える中で、一人ひとりが豊かな人生を送り、安心して暮らせる社会を実現するため、教育が果たす役割は重大であり、教育の在り方も進化を遂げなければならない。社会が抱える諸問題に向き合い、子どもたちの誰もが夢を持ち、その夢を紡いでいく上で、子どもたちに健やかな心身の育成を図ることは、極めて重要である。体力は、人間の活動の源であり、健康維持のほか意欲や気力といった精神面の充実に大きくかかわっており、生きる力を支える重要な要素であると言える。

### 2. 学習指導要領から

平成 29 年 3 月末に新たな学習指導要領が告示された。知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、育成を目指す資質・能力を、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理が図られた。総則（以下、総則という）第 1 の 3 には以下のように示されている。

豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間 及び特別活動（以下「各教科等」という。ただし、第 2 の 3 の（2）のア及びウにおいて、特別活動については学級活動〔学校給食に係るものを除く。〕に限る。）の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にし、教育活動の充実を図るものとする。その際、児童の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

これまでどおり、日本の教育において「生きる力」の育成を目指し、身に付けることを目指す資質や能力を教科、領域を超えて示している。児童生徒に求められる資質・能力の育成のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められているが、それはこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉えることではない。これまでの現行学習指導要領に基づく実践をベースとして保健体育

科の教科として示されている知識と技能の関係性や学びに向かう力、人間性等で示されている指導事項を捉えた上で、思考力、判断力、表現力等の育成をどのように図るかといった深い学びの実現に向けて指導することが最も大切なことであろう。新たに示された体育科の目標は以下のとおりである。

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

(1)その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。

(2)運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。

(3)運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

体育科では現行学習指導要領でも、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で「児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。」と示されている。しかしこれは決して教師が指導しないのではなく、全教科を通じて強調されている子ども主体の学習が深まるよう教師の支援が一層重要になることに留意すべきである。

### 3. 児童の実態から

本校は海を見下ろす山の中腹にあり、春にはウグイスがなき時折タヌキが校内を散歩する、自然に恵まれた学校である。子どもたちは明るく素直で、休み時間には広い運動場で元気に遊ぶ姿が見られる。いろいろなことに積極的に取り組み、友達と協力して仲良く活動することができる。地域の方にも温かく見守られ、のびのびとした学校生活を送っている。しかしその中には、厳しい家庭環境の中、学習習慣が身に付いていないため学力に遅れが目立つ子や、朝起きられず遅刻を繰り返す子、自己肯定感が低く自分の良さを感じることでできない子もいる。また、体を動かすことに消極的な児童や肥満傾向にある児童もあり、2極化が見られる。

体力テストの結果は全国平均と比較して、学年レベルは男子が2項目（反復横跳び・立ち幅跳び）、女子が3項目（上体起こし・反復横跳び・立ち幅跳び）において下回っている。体格集計を見てみると、男子は身長で県・全国より若干低く、体重はほぼ平均同等、女子は身長体重共に県・全国平均を上回っている。児童質問紙調査で気になるのは運動への愛好的態度や運動への自信について男子に比べると女子の肯定群が少ない結果が出ており、運動の楽しさやできたといった実感を味わわせる手立てが必要であると考えます。

友達と助け合う、役割を果たす、話し合いや協力による課題解決などについては肯定的に答えた割合は県・全国の実態を上回る結果が出ており、児童相互のかかわりを意図した活動のある授業が展開されている。しかし、体育授業について楽しいかの問いについては県・全国を下回っている。

運動する楽しさや学ぶことの楽しさを大切にしながら動きづくりや思考力・判断力が身に付く授業が積み重なって、そこから日常生活の中でどれだけ運動する環境を位置づけることができるかが運動好きな子ども、ひいては体力向上につながる課題といえる。体育科の特性を生かし、豊かな人間性を育み、円滑な人間関係を築いていく体育学習を求めている。

### 4. 学校教育目標の具現化から

「人とかかわりを深め共にのびる子どもを育てる」という本校の研究統一主題を具現化するために、その子ども像を「自ら学ぶ子」「たくましい子」「心豊かな子」とおさえ、5部（授業研究部【体育】・学力向上推進部・人権教育部・特別活動部・生徒指導部）で取り組んでいく。授業研究部【体育】では、「たのしいできそう いっしょにもっと！運動好きな十津っ子」という活動する子どもの姿を具体的にイメージし、めざす子ども像の育成に向けて研究主題として取り組むこととした。

## 5. 研究主題にせまる子どもの姿

「たのしい できそう いっしょにもっと！ 運動好きな十津っ子」とは、活動する子どもの姿をイメージしながら掲げたものである。運動そのものの魅力的な価値に触れたのしさを味わっている、できそうだという自己有能感・自己肯定感を感じている、いっしょにもっと活動したいという発展的・親和的な活動欲求に支えられながらやさしく素直な心で他者や自己を認め、学習に向かう子どもの姿を現したものである。

体育授業の教科特性として、身体を通して直接的なかかわりを必要とする学びになっていることが挙げられる。運動そのものやいっしょに運動する仲間、場や用具といった環境も含めて、体育授業におけるこういったかかわりこそが頭の中だけの学びよりリアリティのある、子どもにとって切実なものとなる。また、共通のルールで競ったり、挑戦したりしながら自分をコントロールする力をつけていくのも体育の学習の特徴である。さらに、授業として仲間と学んでいくにあたり、教室という閉じられた空間ではなく、体育館や校庭といった広くて自由な空間を使うことも子どもの心を開きやすいと言える。このようにさまざまな運動を仲間と楽しく行うことで、楽しいな、気持ちいいな、うれしいなという運動への愛好的態度や意欲を育て、自分の見つけた課題解決のために考えて運動したり、工夫したり、自ら考えながら行える力を育てることが変化の激しい未来を生き抜く基礎・基本となるという思いから研究主題として設定した。

このような人とのかかわりを通して共に伸びる学習のあり方について、全教育活動において研究を進めていく。その中でも、かかわりを意図した活動を組みやすい体育科の研究を中核に据えて研究統一主題に迫っていく。

### 人とのかかわりを通して期待するもの

- ・知識、技能（健康・体力）
- ・学び方・コミュニケーション能力（思考力、判断力、表現力）
- ・自己・他者肯定感（豊かな心）

基礎・基本

### 主題達成に向けての具体的な授業、活動イメージ

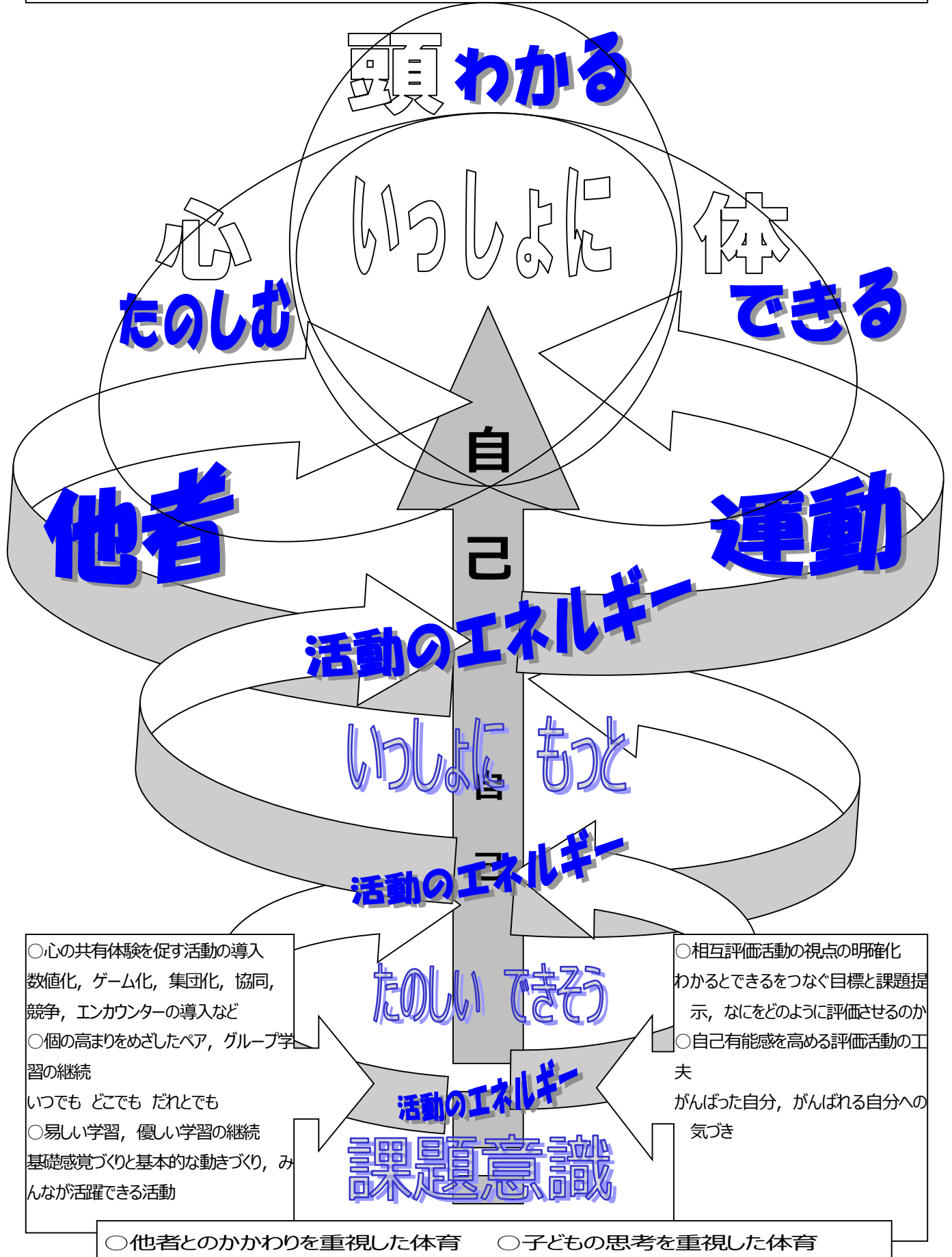
- 心の共有体験を促す活動の導入・・・数値化、ゲーム化、集団化、協同、競争、エンカウンターなど
- 個の高まりをめざしたペア、グループ学習の継続・・・いつでも どこでも だれとでも
- 易しい学習、優しい学習の継続・・・基礎感覚づくりと基本的な動きづくり、みんなが活躍できる活動
- 相互評価活動の視点の明確化・・・わかるとできるをつなぐ目標と課題提示、なにをどのように評価させるのか
- 自己有能感を高める評価活動の工夫・・・がんばった自分、がんばれる自分への気づき など

## Ⅲ 研究仮説

- 心と体のスイッチオンを図る体ほぐしの趣旨を生かした運動を取り入れることで肯定的雰囲気や関係性は深まり、子ども自らが、いつでもどこでもだれとでもかかわりを求めながら学んでいくのではないか？
- 固定しないペアやグループでの学習を繰り返すことで、個々の学びは広がりを見せ、支え合い、助け合う集団を形作っていくのではないか？
- やさしい場やさしい動きを導入することで意欲的な個の学びを引き出し、基礎的・基本的な力を身につけていくのではないか？
- かかわり合いの視点を価値づけ、設定していくことで相互の学びは深まりを見せ、思考力や表現力は高まっていくのではないか？
- 自己の伸びに気づくことができる評価活動としてのかかわりの場面を導入することで、達成感や自己有能感・自己肯定感は高まっていくのではないか？

#### IV 研究構想図

- 個の変容は集団を介した学習によって実現する。
- 個の変容は多様な価値観との出会いの中で実現する。



## V 研究内容

研究主題の具現化に向けて、以下の内容について研究を進めていく。基本的には、それぞれの部で研究内容、方法についての計画を立て実施する。

### 1. 研究授業

- (1) 主題に迫るめあて学習の充実（各学年1本ずつ計6本の全校研の計画，運営）
- (2) カリキュラムにそつた実践の継続と計画の見直し，修正
- (3) 子どもの実態調査（体力テスト，体育授業に関する診断・総括・形成アンケートの実施，集計）

### 2. 保健学習

・「かかわり」を生かした保健学習の実践（課題解決学習 実験実習などを導入した体験学習）

### 3. 教科外体育

かかわりを促す全校的活動・遊びの計画，運営

#### (1) わくわくタイム

・ねらい 異学年での運動遊びを通し，全校児童一人ひとりのかかわりを深める。6年生をリーダーとして児童が主体的に活動できることを目指す。

#### (2) 活動時間等

- ・第1火曜日 10:35～10:45（10分間）+前後2分程度で確認とふり回り
- ・教師は場所に張り付けとし，遊びをリードしながら活動を見守る。
- ・5/7（火）第1回目の活動について→・6年生が1年生を迎えに行く。
  - ・5年生が2年生を迎えに行く。
  - ・3，4年は各児童で活動の場所に行く。

※本年度初の活動なので，児童の実態を見て，支援を行う。

#### (3) 活動の流れ

- ・集合，出欠と活動内容の確認（教師主導からスタートし，実態に応じ児童主体の活動に）
- ・主活動（10分間）
- ・振り返り，次活動への見通し

班・担当	場所	活動（例）
1・14	体育館東，左半分	ターザンロープ
2・15	体育館東，右半分	ふうせん遊び
3・16	運動場東うずまき	うずまきじゃんけん
4・17	鉄棒周辺	遊具遊び（雲梯，ブランコ，鉄棒）
5・18	運動場鉄棒前	かけっこ，折り返しリレー
6・19	運動場中コート①	ボール遊び①（ドッジボール，サッカー系，他）
7・20	砂場	幅跳び遊び
8・21	バスケットボールコート	縄とび①（大縄・短縄）
9・22	三角屋根・タイヤとび周辺	おに遊び（増えおに，ことりおに，他）
10・23	運動場中コート②	ボール遊び②（ドッジボール，サッカー系，他）
11・24	運動場西ベンチ前	しっぽ取り
12・25	運動場野球フェンス周辺	縄とび②（大縄・短縄）
13・26	体育館ステージ側	ドッジビー

#### 4. 環境整備

児童の運動遊びにかかわった環境整備に努め，様々な運動経験とかかわりの場面を意図的に設定することで主題に迫っていく。

- (1) ペットボトルスロー（前庭 2 台）
- (2) ジャンピングボードの作成・設置（前庭 10 枚）※職員作業で作成，後期体育委員会で設置
- (3) 芝生コーナー・芝生マット（鉄棒～雲梯～登り棒付近 60 枚）※体育委員会で設置

※【資料】診断・総括的授業評価アンケート・年間カリキュラム案（別添）